

FD 推進事業 2023レポート



鳴門教育大学

学部・大学院ファカルティ・ディベロップメント委員会



1. 総括 . . . 1



2. 2023（令和5）年度 FD推進事業方針 . . . 2



3. 2023（令和5）年度 FD推進事業 . . . 3



4. 2023（令和5）年度 FD活動一覧 . . . 6



5. 2023（令和5）年度 FD委員会 . . . 7

令和の学校教育において、教師には、自他を取り巻く環境の変化を前向きに受け止めるとともに、自ら目標を定めて学び続けたり、子どもの学びをファシリテートしたりする資質・能力も必要とされるようになった。言い換えるなら、現代の教師には、自他の学びをデザインする力が求められているのである。

こうした社会的要請を受け、教員養成においても、自ら目標を定めて学びを設計する力の育成が重要視されるようになってきている。

こうした社会的要請を背景に、鳴門教育大学では、主体的な学び手としての教師の育成を目指した教員養成システムである「セルフデザイン型学修」を推進している。

セルフデザイン型学修とは、学生自身が目指すべき教員像を設定し、その目標に向けて大学での学びを学生自身がデザインし、自身の学びを省察しながら目標の実現を図る教学システムである。

令和4年度には、教員として習得・伸張すべき資質・能力の方向性を示す「鳴門パースペクティブ」を開発し、令和5年度から、セルフデザイン型学修を実践レベルで導入した。具体的には、令和5年度入学生から実施するカリキュラムの一部をセルフデザイン型学修に沿って改編するとともに、学生が自らの学びの成果を蓄積し、省察に活用する「教員養成学修可視化システム」を実装し、稼働させた。新カリキュラムでは、「鳴教大生学びの第一歩：学びのセルフデザイン」「鳴教大生学びの第一歩：自己・他者・地域・世界の課題解決」「教育実践基礎演習」を必修科目に位置づけ、セルフデザイン型学修の理念と方法の手引きとしている。また、令和4年度に設置されたセルフデザイン型学修支援センターにおいて、学修コンテンツの開発と、学生への支援にあたっている。

こうしたカリキュラムとシステムの整備が進行する一方で、全学的には、セルフデザイン型学修に実地に関わっているのは、新科目の授業担当、一年次生担任など、一部の教員に限られている。大学が目指す方向は理念として理解されていても、具体的な学修実態については十分に共有が図られていないのが現状である。

こうした状況を受けて、令和5年度のFD推進事業では、下記のテーマでシンポジウムを開催し、セルフデザイン型学修に対する教員全体の理解の促進を図ることとした。

「教員養成教育における個別最適化した学修の実現ーセルフデザイン型学修の実際と展望ー」

シンポジウムでは、藤原伸彦セルフデザイン型学修支援センター所長、「鳴教大生学びの第一歩：自己・他者・地域・世界の課題解決」の全体コーディネートを務めた畠山輝雄准教授が登壇し、本年度の学生の学びの実際を報告した。藤原センター長にセルフデザイン型学修の理念、「教員養成学修可視化システム」の概要と学生の使用実態についての報告を、畠山准教授に新設科目の授業の実際についての報告をいただいた後、意見交換を行った。討議や事後アンケートの記述では、学修の実際について具体的にイメージできたという意見が出されたとともに、このシステムを今後の学生支援にどう活用していくかが話題となった。

また、事後アンケートでも9割以上が肯定的評価をしている。これらから、セルフデザイン型学修の実際を共有し、今後の大学全体での関わり方に展望を持つという本事業の目的は達成されたと捉えられる。

また、本年度は、学内で展開されている各種の研修・説明会、報告書などを収集し、FDの観点から整理を行った。授業評価アンケートや授業支援のための研修会などは、これまでも各機関の主導のもとで多く実施されてきた実績がある。これらをFDの事業として位置づけ、次年度以降の情報共有に活かすことをめざしている。

セルフデザイン型学修をはじめとする本学の教員養成システムの改革は端緒についたばかりである。今後、多くの実践を重ねる中で、大学全体で学生の自己実現に向けた支援を行うことが必要となる。今後のFD活動においても、授業改善と並行して、学生支援の方策についての情報共有を図っていくことが求められる。

(文責)

学部・大学院ファカルティ・ディベロップメント委員会委員長
幾田伸司

2. 2023（令和5）年度 FD推進事業方針

鳴門教育大学は、大学が求める教員像及び人事方針を掲げるとともに、第4期（2022（令和4）年度～2027（令和9）年度）中期目標・中期計画期間において【学習成果可視化・セルフデザイン型学修】の推進を掲げている。

これらを踏まえて、令和5年度のFD推進事業は、今年度から実施されているセルフデザイン型学修の実際を共有し、今後の展望を図ることをテーマとして設定した。

【参考】鳴門教育大学が求める教員像（HP公表：<https://www.naruto-u.ac.jp/staff001.html>）

（中略）次のような能力を有し、積極的に大学運営に参画する意欲ある教員を求める。

教 育：学生の信頼に応え、また、**本学の理念に則った教育活動を実践し**、教員養成に熱意のある教員
研 究：学校教育に関し、自己の専門分野との関連において研究の発展に努めるとともに、学校教育に関する先端的
実践研究を推進することができ、その研究成果を学生の教育及び研究指導に反映させる教員
社会貢献：自己の専門分野の知識・技能を活かし、学校教育はもとより地域社会の発展や、国際社会における学術交流
及び教育支援等に寄与する教員

【参考】国立大学法人鳴門教育大学人事方針（令和3年1月14日学長裁定）

3-(1)採用：公募を原則とし、国内外の優秀な人材の確保に努めるとともに、選考においては、教員養成能力を重視する。
3-(2)育成：**教員の資質能力向上を図ることを目的にFD研修等を実施する**ほか、若手教員を学内委員に積極的に登用し、
大学運営能力の育成を図る。

【参考】第4期中期目標前文（抜粋）

関連する中期計画

【ミッション】

- 学校教育を、ICTをはじめとする技術革新と多様化・グローバル化が急激に進展する社会で生きていく子供にとっての社会的共通基盤（インフラストラクチャー）として位置付け、教員養成は、これを担う専門職業人の育成を通して、今後の社会発展と人間のウェルビーイングの実現を左右する重要な位置を占めるものと捉えている。
- 「令和の日本型学校教育」の実現という課題を見据えながら、教員養成大学として果たすべき基礎的な使命を「未来の社会の担い手である全ての子供の可能性を引き出す学校教育の実現」と捉え、これを情報化社会、多様化社会を見据えて実現していくために、本学における教育、研究、社会との共創等の側面での一層の機能強化を図る。

【教育の重点】

- 今後の学習観・指導観の転換を担う教員のあり方として、**教師として主体的に学ぶ力を有し、子供の多様性や教育課題の複雑さに対応した教育実践を創り出していく教師（創造的実践者としての教師）の養成**をねらいとした教育体系の構築を図る。
- 全学DX計画の中で**教師としての主体的な学びを支援するシステム（教員養成学修可視化システム）の開発と運用**を行い、新たな教員養成のモデルを構築し発信する。

【教育委員会、学校等の支援】

- 新たな教育課題に対応したICT利活用、多様性教育、教科横断的教育等の方策に関して、教育委員会、学校等のニーズにきめ細かく応えて研究開発を行う仕組みの構築を行い、学校等における教育課題の解決に寄与する。
- また、教育委員会との連携を一層強化し、現職教員研修の高度化と効率化を支援する。

【教職大学院遠隔教育プログラム】

現職教員や教員免許を保持している社会人等が無理なく働きながら学び続けるための機能を強化した遠隔型教職大学院プログラムを設置し、教職大学院での学修が可能なシステムを構築する。

【グローバル教員養成】

文化的多様性教育の資質向上を図るため、教職大学院生（現職教員）を対象に、JICAとの連携による開発途上国の教育者（研修員及び外国人留学生）と共に学ぶ学修プログラムを新たに構築する。

【「令和の日本型学校教育」に対応する教員輩出】

ICT活用教育、多様性教育、教科横断的教育等に対応したカリキュラムを開発・実施し、学校現場における新たな教育課題に対応するコンピテンシーを身に付け、第4期中の学校現場において必要とされる教員を輩出する。

【学修成果可視化・セルフデザイン型学修】

新社会を担う教員の資質能力に関する**新たな教員養成スタンダード及びそれに応じたルーブリックを開発し**、これに基づきデジタルデータの統合による学修可視化システムの開発・運用により、**教師としての基盤的能力とともに学生個々の教師としての特長を確認、伸長する教員養成教育を推進**する。

【四国国立5大学連携教職課程】

地域ブロックレベルでの教員養成機能の効率化・高度化を両立（最適化）する「広域分散協働型教員養成モデル」として、四国全5国立大学における「大学等連携推進法人」を活用した「連携教職課程」を設置し、教育の質保証を担保した運営を推進する。



3. 2023（令和5）年度 FD推進事業〈概要〉

 日時

2023（令和5）年12月6日（水）16:20～17:50

 場所

鳴門教育大学総合学生支援棟3階F会議室（Teams参加可）

 対象者

鳴門教育大学全教員（参加71名／全教員124名）

 テーマ

教員養成教育における個別最適化した学修の実現
—セルフデザイン型学修の実際と展望—


 趣旨と論点

本学では、第4期中期目標・計画期間において、従来の規準適応型教員養成から自己伸長型教員養成への転換を目指している。その実現に向けて、令和5年度からセルフデザイン型学修を推進し、この学修を支援する「学修成果・経過可視化システム」を導入した。セルフデザイン型学修は、大学の学びを通して「自分はどうなりたいのか」を自ら探り、その実現に向けて自ら学びをデザインする経験をくり返すことを通して、学び続ける教員を育てることをねらっている。この可視化システムが実効性を持つように、今後、全教員が協働して学生支援に当たっていくことが求められよう。

FD推進事業では、セルフデザイン型学修で蓄積される学修記録を読み解くための手立てとして、ルーブリックに焦点化した研修を令和4年度に実施した。この流れを踏まえ、令和5年度は、本格的に稼働し始めたセルフデザイン型学修の実際を共有し、今後に向けての課題を検討するための共同討議を企画する。

セルフデザイン型学修を支援する「学修成果・経過可視化システム」は、学生自らが学びの成果と課題を蓄積し、振り返ることができるようになっており、令和5年度学部入学生から活用し始めている。また、初年次教育においては、セルフデザイン型学修の具体的実践も行っている。こうした学修の中で、学生は実際に何をを行い、何を考えたのか。そして、我々教員はどのように学生をサポートしていくべきか。セルフデザイン型学修は始まったばかりであり、その具体的姿はあまり浸透していない。そこで本年度のFD推進事業でセルフデザイン型学修を通してどのような学生を育てたいかを改めて共有するとともに、初年度（令和4年度）実践の成果と課題を展望する。

【第4期中期目標 I-2-⑩-(2)】
新社会を担う教員の資質能力に関する新たな教員養成スタンダード及びそれに応じたルーブリックを開発し、これに基づき統合的LMS（「学修省察支援システム（NICES）」、「教学支援システム」）、「教育実習事前自己診断システム（N-CBT）」、「教育実習支援システム」の4システムのデジタルデータの統合による学修可視化システムの開発・運用により、教師としての基盤的能力とともに学生個々の教師としての特長を確認、伸長する教員養成教育を推進する。

 プログラム

時間	次第	登壇者
16:20～16:35	開会挨拶	佐古秀一学長 (司会：幾田伸司 FD委員会委員長)
16:35～16:55	セルフデザイン型学修の目標と方法	藤原 伸彦 特命補佐・セルフデザイン型学修支援センター所長
16:55～17:15	『鳴教大生学びの第一歩：自己・他者・地域・世界の課題解決』の実際	畠山 輝雄 准教授（社会科教育コース）
17:15～17:45	質疑応答・共同討議	—（全員参加）
17:45～17:50	閉会挨拶	梅津正美理事・副学長



3. 2023（令和5）年度 FD推進事業<プログラム>

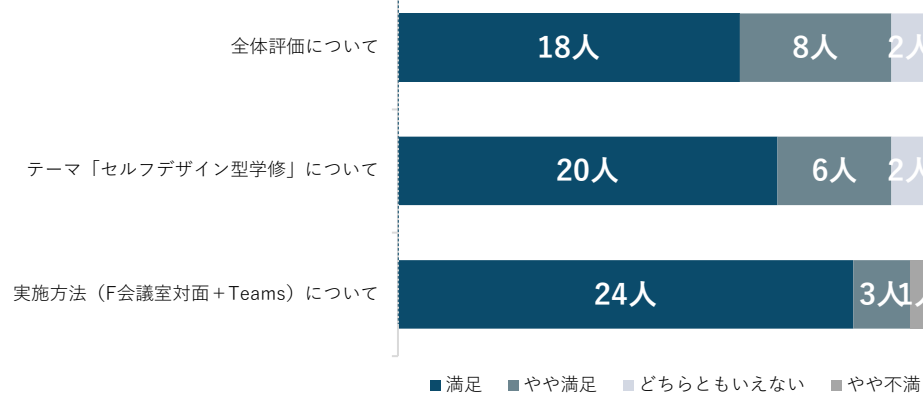
プログラム	風景	
<p>開会挨拶 (佐古秀一学長)</p>		
<p>セルフデザイン型学修の目標と方法 (藤原伸彦特命補佐・セルフデザイン型学修支援センター所長)</p>		
<p>『鳴教大生学びの第一歩：自己・他者・地域・世界の課題解決』の実際 (畠山輝雄 准教授 (社会科教育コース))</p>		
<p>質疑応答・共同討議 (全員参加)</p>		<p>Q：学生が初年次教育を受けて、教科系の授業で、教員はこんな認識で授業をすると学生は伸びていくという視点や考えはあるか？</p> <p>A（藤原）：教採の面接の際、学生から抽象化された言葉しか出てこないが、そうではなく、自分の具体的な体験を議論する、考える、伝えることが重要。 A（畠山）：習ったことをそのまま暗記して、応用が利かない学生が多い。応用を何回も繰り返してすることが必要になる。</p> <p>Q：今後学生に指導していく中でシステムをどう活用すればいいのか？</p> <p>A（藤原）：記録を蓄積し、学生の学びのサポートしていくシステムとして、先生方が「どんな勉強してきたの？」「模擬授業でどんな課題があったの？」と問いかけながらシステムを使っていくことを目指したい。学生が記録を残さない状況になってきているので、改善しながら使っていくことを目指したい。</p>
<p>閉会挨拶 (梅津理事・副学長)</p>		



3. 2023（令和5）年度 FD推進事業概要 <アンケート結果>



■12/06（水）開催「FD推進事業」について



■今後「FD推進事業」として取り上げてほしいテーマ

- セルフデザイン型学習と各授業科目における指導のあり方との関係
- 初年次教育を踏まえた2年次以降の発展的教育のあり方
- プロジェクト型学習が、学生にとって「真性の課題」（本気でとりくむ）となるのが望ましいと思います。そのための条件、有効な設計、学内外の取りくみ事例を勉強させていただけますと、幸いです。
- 遠隔授業の実状、問題点や各々の問題の解決策

■その他自由記述

- セルフデザイン型学修の考え方やそれを実際に授業展開された内容がよく理解できました。完成形には道半ばですが課題等も明らかにされさらに検討していかなければならないと思いました。
- 『鳴教大生学びの第一歩：自己・他者・地域・世界の課題解決』授業の他の学生発表も少し見たかった。
- 1年次のふれあい実習への向き合い方がこれまでと違うということを実習担当者間で話していたとき、この「鳴教大生 学びの第一歩」の成果ではないかという結論になりました。授業についての詳細を伺う中で、それが確信できた気がしています。さらなる発展を期待し、自分自身が関わるところで貢献できるところを探っていきたいと思いました。ありがとうございました。
- 学生が自分の4年間の主体的、協働探究的な学びを自らデザインする環境をつくる価値と具体的な事例を教わり、とても参考になりました。大学教員一人ひとりの専門的な知見をどのように示しながら学生のセルフデザインの一助としてもらえるか、今後も考えていきたいです。

※鳴門教育大学HP及び学内ポータルサイトからFD機能を含む活動を集約。
 ※情報体系は機関別認証評価におけるFD状況に係る提出様式を踏まえている。

取組	主催	実施内容・方法
新任職員研修・オリエンテーション	総務課	大学に採用となった教職員が、本学の理念及び達成すべき諸課題等について理解し、職務遂行上必要な基礎的知識・倫理観を学ぶ機会。
全学教職員説明会	執行部	学内教職員が、「鳴門パースペクティブの策定と学士課程カリキュラムの編成」「セルフデザイン型学修の展開」について学ぶ機会。
CREDランチタイムミーティング	遠隔教育推進センター	学内教員が、レベルの高い遠隔授業を開発するための情報交換をする機会。
教職員研修(動画撮影・編集における基礎知識)	遠隔教育推進センター	学内教員が、動画撮影・編集における基礎知識を学ぶ機会。
学生による授業評価アンケート(報告書)	教務委員会	学内教員が、学生による授業評価を確認し、授業改善をはじめとする内部質保証につなげる仕組み。
教育等に関するアンケート(報告書)	総務委員会	学内教職員が、卒業(修了)生、徳島県内教育長・学校長からの評価について確認し、内部質保証につなげる仕組み。
デジタル教科書展示説明会	情報基盤センター	学内教員が、本学で利用できるデジタル教科書及び利用手続き等について理解を深める機会。
e-ラーニング研修(公文書管理及び個人情報保護)	総務課法規係	学内教職員が、公文書管理・個人情報保護について学ぶ機会。
合理的配慮に関する教職員研修会	学生なんでも相談室	学内教職員が、大学におけるセクシュアル・ハラスメントへの対応と予防について学ぶ機会。
生成AI研修会	教員養成DX推進機構	学内教職員及び学外参加者が、生成AI(ChatGPT, Bing AI等)の効果的な利活用に向けて学ぶ機会。
教員養成DX・ICT活用教育シンポジウム	教員養成DX推進機構	学内教職員及び学外参加者が、デジタル技術を活用した学校現場の教育改善に寄与するため、全国各地や海外におけるGIGAスクール構想や教育DX・先端技術活用等について学ぶ機会。
電子決裁・文書管理システム導入に係る操作研修	総務課法規係	学内教職員が、業務効率化及びテレワーク環境を構築する電子決裁・文書管理システムについて学ぶ機会。
情報セキュリティセミナー	情報基盤センター	学内教職員が、情報セキュリティに関する基礎的な理解、知識や意識の向上を図る機会。

氏 名	職 名	備 考
幾田 伸司	特命補佐 (教師教育研究・FD担当)	委員長
武田 清	専攻長 (人間教育専攻)	
内藤 隆	専攻長 (高度学校教育実践専攻 (教科・総合系))	
小坂 浩嗣	専攻長 (高度学校教育実践専攻長 (教職系))	
吉井 健治	副専攻長 (人間教育専攻)	
原田 昌博	副専攻長 (高度学校教育実践専攻 (教科・総合系))	
福井 典代	副専攻長 (高度学校教育実践専攻 (教科・総合系))	
川上 綾子	副専攻長 (高度学校教育実践専攻 (教職系))	
山田 芳明	特命補佐 (学部教育・連携教職課程担当)	
梅津 正美	副学長 (教育・改革担当)	オブザーバー